

階層的概念構造の展開と抑制： 認知言語学の観点からみた再帰性／志向性

Development and Restraints of Layered Conceptual Structures: A Cognitive Linguistic Approach to Recursion and Intentionality

長谷部 陽一郎

Yoichiro Hasebe

同志社大学

Doshisha University

yhasebe@mail.doshisha.ac.jp

Abstract

The present paper discusses problems regarding recursion and intentionality in the natural language, with special attention given to sentences containing multiple embeddings of grammatical constructions, each headed by a verb of psychological states, such as ‘think’ and ‘believe,’ and reporting verbs, such as ‘say’ and ‘tell.’ Though it has been traditionally argued that one of the most striking features of the human language faculty is the ability to handle such sentences with any number of embeddings, layerings of reporting/psychological verb constructions could be problematic in terms of their acceptability and/or interpretability. This paper presents a cognitive linguistic account of the conceptual structures behind (in)felicitous instances of such complex structures, and sheds some light on this underexplored area of study.

Keywords — recursion, intentionality, grounding, embedding, cognitive linguistics

1. はじめに

本稿で扱うのは、(1)のような表現の背後にある認知構造である。

- (1) a. We know that Taro thinks that Hanako said that he was lying.
b. 自分がウソをついていると花子が言ったと太郎が思っていることを私たちは知っている。

(1a)は英語、(1b)は日本語の例だが、いずれにおいても思考や発話の内容を補文形式で述べるタイプの動詞が多重的な入れ子構造を作っている。英語では

think や *believe*, 日本語は「思う」や「考える」によって代表される動詞群を「思考動詞 (psych verb)」と、英語では *say* や *tell*, 日本語では「言う」や「述べる」によって代表される動詞群を「報告動詞 (reporting verb)」とそれぞれ呼ぶことにする。そして、多重的な心理・報告動詞構文の背後にある階層的概念構造が形成されるメカニズムと抑制されるメカニズムの両方について考察の目を向ける。

伝統的に生成文法 (generative grammar) の枠組みでは、(1)のような埋め込み文を生成できることが、ヒトの言語能力の最も特筆すべき性質であると主張されてきた。¹ 文構成にかかわる規則を再帰的に適用することで、原理的に無限の長さの文を組み立てることができる。実際には延々と続くような長大な文が発せられることはないが、それは記憶容量の制約、注意の散逸、あるいは何らかのエラーによるものであり、ヒトの言語器官は本質的にあらゆる長さの文を生成できると論じてきた (Chomsky 1965, 1995)。

このように自律的な生得的能力としての言語能力を想定する生成文法と異なり、認知言語学 (cognitive linguistics) では言語の使用は必ずしもそれだけのために発達したモジュール的な機構ではなく、ヒトという種に与えられた一般認知能力の協働的作用と、歴史的時間のなかで認知的に動機付けられた慣習の存在を中核として成立しているとみる (Langacker 1987, 1991; Tomasello 2003)。

認知言語学の言語観は生成文法のそれとは大きく異なっているが、埋め込み構造を含む文は確かに存在しており、二重、三重の埋め込みが原理的に可能であることも事実である。したがって、認知言語学においても、言語表現の再帰性の問題に目を向ける必要がある。

¹より正確には、「埋め込み文を含む様々な統語的併合 (merge) を再帰的に遂行する能力を持っていること」であるが、ここでは生成文法の詳細には立ち入らないことにする。

る。²

ただし、本稿では言語の再帰構造全般に関して論じるのではなく、(1)のような多重的な心理・報告動詞構文に焦点を当て、ヒトにとっていわゆる「心の読み合い」がこれほどまでに重要なものであるにも関わらず、なぜそれを言語的に表現する際には各種の制約が生じてくるのかを明らかにしたい。

認知言語学の立場をとる Tomasello (1999) によると、種としてのヒトが持つ最も重要な能力は、自然的な環境の中で自らの「心」の存在を知り、さらにそれと同形の把握が「他者」にもあてはまると理解することである。そうであるなら、(1)のように「心の読み合い」の過程を辿るような発話は、ヒトならではの能力の自然な反映である。しかし、実際の言語活動において、多重的な埋め込み構造を持った文の発話は必ずしも無制限に行われるわけではない。(1)のような表現の解釈にはそれなりの認知的負荷がかかる。個人差はあると思われるが、このような文を、日常的で一般的な状況での発話の例として考えるのはやや難しい。³

そこで以下では、認知言語学の観点から、多重的な心理・報告動詞構文の形成にかかわる階層的な概念構造の働きを観察することを通じて、どのような要因が心理・報告動詞構文の自由な多重化を妨げているかを検討する。また、Searle による一連の言語哲学的論考で示される志向的状态 (intentional state) との関連についても触れ (Searle 1983; 1998), 「心の読み合い」を遂行する基本的な認知能力を有しているはずの私達にとって、それらをリテラルに言語化することがなぜ必ずしも容易でないのか考察していきたい。

2. 多重的な埋め込み構造の展開

認知言語学において「心の読み合い」を扱う多重的な埋め込みを含んだ文が一般的にどのように分析されるのかを確認するため、まず Langacker (2008) で示された認知文法 (Cognitive Grammar) の枠組みを用いた分析の概要を示す。(2) は多重的な埋め込みを含む文の例である。

- (2) Alice said that Bill believes that Cindy claims that Doris swallowed a spider.

Langacker (2008) は図1のような図式を用いてこの文の概念構造を示している。

²認知言語学の立場から言語における再帰性について論じた研究としては Harder (2010), 中村 (2013), 長谷部 (2016) などがある。

³(1b) に関しては「自分」という語に固有の問題がこの文の解釈にかかる認知的負荷を増大させている可能性はある。日本語の「自分」と埋め込み文・引用文とのかわりについては長谷部 (2007) を参照されたい。

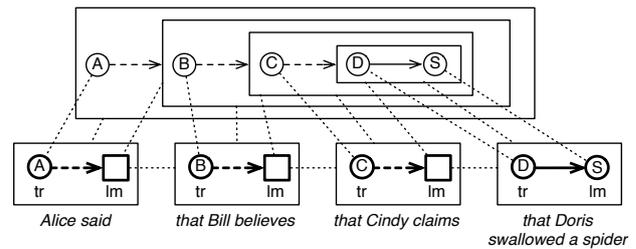


図1 多重的な埋め込みを含む文の概念構造

Langacker (2008) はこのような埋め込み文の構造が逐次的に処理されていくことを強調する。認知文法では言語の概念構造には A/D (autonomous/dependent)-alignment と呼ばれる階層的な依存関係があり、これが順次解決されていくプロセスとして捉えるのである。Alice said という部分表現は、Alice をトラジェクター (tr) とした概念構造を立ち上げる。トラジェクターとはある概念構造の中で最も高い際立ちを得る要素である。しかしその構造の中で第二の際立ちを得るランドマーク (lm) となる要素はまだ詳述されていない。そこで、後続する that Bill believes がこれに具体性を与え、当初の依存関係の解決をもたらす。しかし that Bill believes によって展開される概念構造は内部に新たな依存的要素を含んでおり、後続する要素 that Cindy claims による充足を待たねばならない。最終的に that Doris swallowed a spider という節により、すべての A/D 関係が解決し、文として成立するための構造的な要件を満たす。

上記の分析は生成文法におけるそれとは大きく異なる。認知文法では A/D-alignment の展開を、規則により駆動されるものとは捉えていない。A/D-alignment はあくまで認知主体の概念化 (conceptualization) のプロセスを特徴づけるものである。認知文法において、他動詞文の概念構造は最も高い際立ちを持つ要素であるトラジェクターと、それに次ぐ際立ちを示すランドマークから構成される。そしてそれらが、概念要素の主要なタイプである thing と relation のいずれかとして自律した安定状態を得たならば、文が談話の中で一回的な意味付けを得るために必要な作用であるグラウンディング (grounding) を受けることができる。

なお、図1には複数の矢印が要素と要素の間に施されている。このような矢印はいずれも志向的な関係を意味する。実線は一般的にある種の物理的な作用があることを含意するが、破線の矢印はその方向性が心的なものであることを意味している。

さて、図1にも示されているように、(2) には多重的な補文構造が含まれている。しかし、こうした文は

果たして実際の談話の中でどれだけ使用されるだろうか。(2)で表現可能な内容的意味は、通常ならば別の形で表現されるのではないだろうか。

次の(3a)を考えてみよう。上の(2)に比べるとシンプルな文である。⁴

- (3) a. Bill says Jack says it's OK.
b. It's OK. Jack says so. At least, that's what Bill says.

この文に構造的な問題はない。しかし、多くの場合、同じ内容は(3b)のように、複数の文を連ねることにより表現されることだろう。

Tomasello (1999, 2003)によれば、ヒトは自然的な環境において自発的に「他者の心」を理解する能力を得た。そしてこのことがヒトが言語を獲得するにあたり重要な役割を果たした。ではなぜ、心理・報告動詞の多重的な使用が必ずしも自然な発話に結びつかないのだろうか。もちろん、記憶保持の問題も関わっていると考えられる。しかし Langacker (2008) が論じるように、多重的な埋め込み文であっても逐次的な処理がなされるのであれば、記憶への負荷の問題は必ずしも決定的な事項ではない。発話が企図されたように理解されるためには、発話内容に参加する要素を逐一記憶に留めておく必要はある。しかしそのことは複数の文と代名詞を用いて表現したとしても基本的には同様である。そこで以下では、心理・報告動詞の多重的使用に関わる制約についてより詳しくみていく。

3. 埋め込み構造とグラウンディング

前節では Langacker (2008) で多重的な埋め込み構文の認知プロセスを示すために用いられた例文(2)を取り上げ、このような文が実際に発話される可能性は必ずしも高くないことを指摘した。このことに関係するとみられる様々な概念のうち、最も重要なものは、グラウンディング (grounding) である。⁵ グラウンディングとは、認知文法における概念要素の主要タイプである thing と relation を談話の場面の「いま・ここ」に接地させる。thing はグラウンディングを経て定形名詞句 (nominal) を形成し、relation はグラウンディングを経て定形節 (finite clause) を形成する。

例えば、desk という名詞それ自体が表す意味内容は thing 要素の1つのタイプに過ぎず、談話世界における実体性をもたない。しかし、a desk, desks, the desk, that desk のように冠詞や接辞と結合し、適切なグラ

ウンディングの過程を経ることで、インスタンスとしての生を受ける。同様に、she+come という relation は、she comes, she came, she will come のように必要な形式的要件を満たすとき、同時に談話における「いま・ここ」との結び付きを得て、実質的で一回的な意味を有する概念構造としての役割を果たせるようになる。

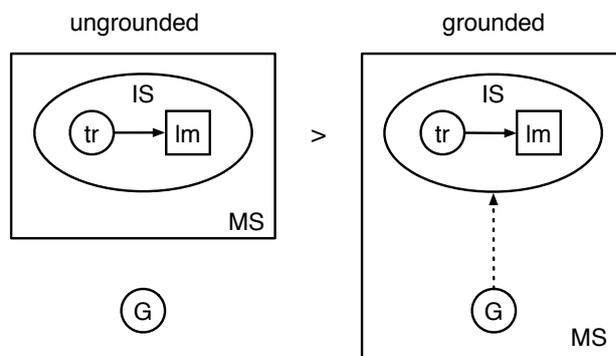


図2 グラウンディング

図2はトラジェクター (tr) とランドマーク (lm) を含んだ relation のグラウンディングを図式化している。まず、左側の ungrounded な概念構造に着目しよう。ここで tr と lm を取り囲む IS は直接叙述領域 (immediate scope of predication) を表す。IS は表現の意味に直接関わる (=プロファイルされた) 要素を含む領域であり、しばしばオンステージ領域 (onstage region) あるいは客体的場面 (objective scene) とも呼ばれる。G はグラウンドを表す。グラウンドとは、いわば発話の「いま・ここ」であり、談話とその参与者、そしてそれらを取りまく直接的な環境の総体を意味する。また MS は最大叙述領域 (maximal scope of predication) を表している。MS は言語表現が実際に指し示す対象だけでなく、背景的な知識として表現の意味構築に何らかの形で関わりを持つ要素を包摂する領域である。グラウンディングされていない段階での概念構造では、G がこの MS 内に取り込まれていないことがポイントとなる。これは、グラウンドされていない要素は、談話における一回的な意味構築のプロセスに参加していないことを意味する。⁶

次に、図2の右側にある grounded な概念構造に目を向けると、ここでは G が MS に含まれている。ただしここでも G は IS の内側には入っておらず、IS の外側から、オンステージ領域と志向的な関係を結ぶ

⁴(3) は Harder (2010) より。

⁵グラウンディングの詳細については、Langacker (1985, 2002) が詳しい。

⁶オブジェクト指向プログラミングの用語をメタファー的に用いるなら、グラウンディングとは、言語の概念構造というプログラムの中で、すでにあるクラスからインスタンスを生成するような作用だと言うことができる。

(=破線矢印). なお, グラウンディングという意味作用は, 認識の主たる対象として前景化するものではなく, プロファイルされた対象に談話空間における認知的な位置付けを与えるべくあくまでオフステージで行われることに注意が必要である.⁷

英語に関しては一部の表現カテゴリーが典型的なグラウンディング叙述詞として挙げられている (Langacker 1985, 2002). thing のグラウンディングに関わる要素としては指示詞 (*this, that, these those*) や冠詞 (*the, a, unstressed some, zero*), 一部の数量詞 (*all, most, some, no, any, every, each*) がある. また, relation のグラウンディングに関わる要素としては時制の接辞や法助動詞の類 (*may, will, shall, can, must*) がある.

これらのグラウンディング叙述詞には, 本稿で扱う問題に関係する興味深い特徴がある.

- (4) a. Jennifer noticed that **this** wall **needs** a new coat of paint.
 b. Rachel said that **this** piano **needed** tuning.

上の (4a) は *notice* という心理動詞を軸にした埋め込み構造を含む. *Jennifer* を主語とする主節と補文標識 *that* に続く補文はそれぞれグラウンディングを受けている. ここで補文の方に注意を向けると, まず, 主語の *this* は thing タイプのグラウンディング叙述詞である. また, 動詞 *need* に付加された接辞の *-s* は relation タイプのグラウンディング叙述詞である. これらのグラウンディング叙述詞の働きにより概念要素が「どこに」接地しているかを考えてみよう. 言うまでもなく, 心理・報告動詞の補文の内容は, その動詞の主語が表す主体の思考もしくは発話内容である. しかし, 補文内のグラウンディング要素により接地する先は, 動詞 *noticed* の主語である *Jennifer* にとっての「いま・ここ」ではなく, (4a) の発話者にとっての「いま・ここ」であり, (4a) における *this* は *Jennifer* にとっての「これ」ではなく, あくまで発話者にとっての「これ」を意味する.

また, *this wall needs a new coat of paint* という補文の時制が示す「現在」は *Jennifer* にとっての現在でなく, やはり話者にとっての現在である. したがって, 問題となっている *wall* は, この文が発話された時点においてもやはり塗り直しを必要としていることに

⁷例外的な場合もある. 一人称および二人称代名詞は, それ自体がグラウンドの一部であり, 要素を位置付けるための基準点を構成する要素が, 同時に位置付けられる対象にもなっている. また, 後の議論に関連することであるが, いわゆる発話行為文もそのような性質を持つ.

なる.

同様のことは (4b) についても言える. 違いは補文内の時制が過去になっていることだけである. ここで「過去」も, 報告動詞 *said* の主語が指す *Rachel* にとっての過去ではなく, (4b) の話者にとっての過去である. したがって, *Rachel* が言及した *piano* が現在も調律を必要としているかどうかは定かではない.

このように, 英語におけるグラウンディングは文の埋め込み構造の内部に入り込んで作用するため, 1 節および 2 節で示したような定形節の多重埋め込みを含んだ文の場合, 形式的には単純な入れ子構造に過ぎないように見えても, 実際には階層ごとにやや異なった性質を帯びることになる. なぜなら, 階層が増えるごとに, 扱われる内容が発話者の直接経験から離れていくにもかかわらず, 定形節としてグラウンディングを受けている以上, 表現中で用いられる要素は一様に話者自身の「いま・ここ」に紐付けられることになるからである.⁸

なお, 類似した現象は英語だけでなく日本語にも観察される.

- (5) a. 社長は今回のプロジェクトで山本部長が大いに**活躍なさった**ことを十分知っておられる.
 b. お母様が帰っていらしたら, 田中が**お礼を申していた**とお伝え下さい.

日本語でどのような要素がグラウンディング叙述詞としての役割を果たすかは, 必ずしもはっきりしていない.⁹ しかし, 一般に敬語と呼ばれる表現の類は, 対象となる要素を話者自身の認識や談話世界と紐付けるため, 日本語におけるグラウンディングと何らかの関わりがあると考えられる. そのような敬語表現は, 心理・報告動詞を軸にした埋め込み文における補文内部においても形式や構造を保持するという特徴がある (cf. 廣瀬 2016). (5a) の「活躍なさった」は話者にとっての敬意を反映した尊敬表現であり, (5b) の「申していた」も同様に話者の側にある相手への敬意から来る謙讓表現である. いずれも補文内部に生起しながら, その概念的な位置付けの基準点が, 心理・報告動詞が表現する事態 («知る」「伝える») の主体ではなく話者自身に

⁸Fauconnier (1997) のメンタル・スペース理論は, このような概念構造の多重的な入れ子構造が示す様々な興味深い特徴を扱った, もう一つの認知言語学的アプローチである.

⁹時枝文法 (時枝 1941) における「辞」の概念は認知文法におけるグラウンディングの概念と部分的に共通する. しかし, 時枝が「辞」とする要素の範囲は, 認知文法でグラウンディング叙述詞と定義される要素の範囲よりも広い. 日本語におけるグラウンディングに関する予備的な考察については長谷部 (2016) を参照.

求められる点で、先に考察した英語の補文内に生起するグラウンディング叙述詞の性質と一致する。

以上のような、英語や日本語におけるグラウンディングのメカニズムは、心理・報告動詞構文の(過度な)多重化に対して、概念構造構築のレベルである種の制約がもたらされる可能性があることを示唆している。

4. 思考動詞の発話行為の意味

本節では、思考・報告動詞の多重化の抑制に関わるとみられるもう1つの要因に言及する。*think* や *believe* などの思考動詞は、本来的に一人称的/主観的な行為や状態の表現である。一人称主語と共に用いられるとき、これらの動詞は補文によって表される命題に対して必ずしも直接的な関わりをもたないが、その一方で、補文の内容を核とした発話行為の遂行に貢献する要素として機能するという特徴を持っており、むしろこちらの機能が語の意味の重要な側面となる。しかし、多重的な補文構造の内部に埋め込まれるとき、そうした意味の側面は失われ、客観的事態としての意味の側面のみが前景化してくることになる。このことも思考動詞が多重的な補文構造の中で用いられる際の制約につながっているとみられる。

次の(6)は主節で用いられる心理動詞が発話行為の意味を生じさせている例である。いずれも、単に事実を述べているだけではなく、ある種の言語行為を遂行するような発話である。

- (6) a. I know this is a stupid question, but do you think we can really make it?
[責任の回避]
- b. We recognize that we need to provide an alternative learning environment.
[同意・確認]
- c. I believe a strong will helps us realize our dream. [願望の表明]

先に思考動詞はそれによって導かれる命題の意味内容に大きく寄与しないことがあると述べたが、(6)のような例ではこれが当てはまる。正しく意味内容を伝えるという観点からみれば、*I know, I believe, we recognize* といった表明は不要であるときえ言える。しかし、それでもなおこれらの表現が用いられるのは、それぞれの表現の語用論的意味が価値を持っていることの現れである。

Langacker (2008) は、文の発話の背後には図3のような階層的構造があると仮定し、グラウンディングを受けた客観的内容は、発話イベントにおいて一つの

機能単位として発話行為シナリオの中に位置付けられると論じている。このモデルが言語使用の認知プロセスを正しく表しているとするれば、内部的にどれだけ複雑な構造を持っていたとしても、文は全体として1つの機能単位として発話行為シナリオに位置付けられることになる。これは、本節で示した思考動詞の多重的な補文構造がもたらす違和感の原因に関する説明と一致する。

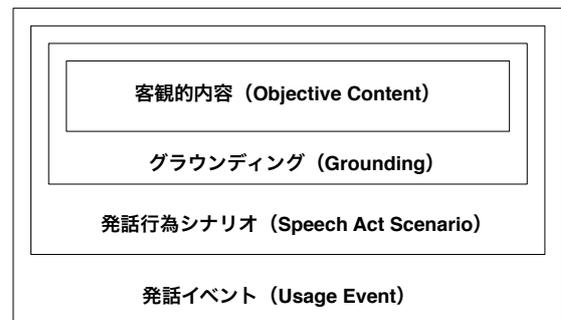


図3 発話の階層構造

5. 心理・報告動詞構文の多重化の事例

ここまで、心理・報告動詞の類の多重的な埋め込みにかかわる制約の要因について考察してきたが、本節では逆に、そうした構造を持った文が実際に発話される時、どのような特徴を見出すことができるかについて触れておきたい。

認知言語学的に言えば、補文とは把握された事態概念に一定の「まとまり」を与え、ひとつの客体的な概念要素として上位の概念構造に参加させる文法的仕組みである。前節までに述べた、心理・報告動詞の多重的な埋め込み構造が生じさせる不自然さの要因は、端的に言えば、補文内に含まれる心理・報告動詞が主語要素による補文内容に対する「一人称的把握」を想起させることで、そのような「まとまり」の形成を阻害することにあると言える。

一方、心理・報告動詞の一人称的把握の側面ではなく、客体的な行為事象としての側面に焦点が当てられるなら(そしてそれを支える文脈的背景が得られるなら)、多重的な補文構造を形成することに必ずしも重大な障害は生じないと予測できる。次の(7)と(8)はコーパスから得られた、そのような多重的な埋め込み構造の実例である¹⁰

¹⁰ これらの例は TED Corpus Search Engine (TCSE) を用いて採取した。先行する談話文脈から切り離した形では的確に意味を把握することが困難な場合があるため、ここでは TCSE から得られる日本語訳と共に示す。TCSE の詳細については Hasebe (2015) を参照。

- (7) Research **tells us that** the more a woman **believes that** everyone gets PMS, the more likely she is to erroneously report that she has it. [TED: 2214]

研究では誰もがPMSになると信じている人の方が自分はPMSだと誤って訴える傾向があります。

- (8) One of the governors of one of the states **told me that** he didn't **realize that** more women were, in fact, literally sitting on the side of the room, which they are, and now he made a rule that all the women on his staff need to sit at the table. [TED: 1906]

ある州知事の方には女性の多くが文字通り部屋の隅に座っていることに気付かなかったと言われました。今では女性スタッフ全員をテーブルに着かせると決めました。

(7)における補文内の *a woman believes that ...* は学術的な調査結果の一部として述べられた一般的記述である。主語である *a woman* は特定の女性を指す要素ではなく、*believes that* 以下の補文の内容との間に「一人称的把握」はほとんど想起されない。

次に(8)の *One of the governors of one of the states told me that ...* の方はやや状況が異なるが、ここでは、社会的に重要な地位にある人物がある事柄に「気付いていなかった」という事実性が発話のポイントになっており、補文内の *he didn't realize that ...* から想起され得る一人称的把握の度合いはやはり減じられていると言える。

主節の動詞が主体的な把握を想起させるものであることはもちろん問題とならない。またそれらは語用論的意味を担う非命題的な要素となりやすく (cf. Langacker 2009), 直下の補文内に主体的な把握を想起させるような構造が埋め込まれること状況を許容することも多い。

- (9) Sometimes in the media, and even more rarely, but sometimes even scientists will say that something or other has been scientifically proven. But **I hope that you understand that** science never proves anything definitively forever. [TED Corpus: 2644]

メディアが時として使う表現でありさらに稀とはいえときに科学者も使う表現に何か「科学的に証明された」という言い方があります。ご理解いただけるとは思います。サイエンスが

何かを断定的に証明しそれが永遠ということはありません。

- (10) I am a writer and I'm also an English teacher, which means I think about words for a living. You could **say that** I get paid to **argue that** the language we use matters, and I would like to argue that many of the metaphors we use to talk about love—maybe even most of them—are a problem. [TED Corpus: 2661]

私は作家で英語教師でもあります。言葉について考えるのが仕事ということです。私達が使う言語の重要性を説くことで稼いでいるようなものです。私は私達が恋愛について語る時に使う—多くのメタファーにはあるいは大部分かもしれませんが—問題があると思っています。

上の(9), (10)の各例においては、多分に語用論的な役割を担い、また多かれ少なかれ慣用的な表現として確立されている主節表現に対する補文として、もう1つの補文構造が埋め込まれている。このように、適切な条件が揃いさえすれば、心理動詞・報告動詞の補文構造の多重化も、十分に容認可能で自然な理解を妨げない表現を生むと言える。

6. 概念内容の表示と志向的意識

ここで本稿の最初に示した問いに立ち戻って考えてみたい。認知言語学的な言語観をとる Tomasello (1999) は、「他者の心」の存在を自然環境の中で理解できることがヒトの技術発達や言語発達を促したと論じる。また Corballis (2011) は、自然言語の構造に観察される再帰性は、いわゆるマキャベリ的知性—すなわち「心の読み合い」の必要性から発達した対人・社会関係的な知性—に起源があると論じた。ではそうした「心の読み合い」の把握を1文のうちに言語化することが、なぜ必ずしも自然な発話につながらないのだろうか。

もし表現しようとする概念が私たちにとっておよそ把握不可能であったり、あるいは現実的にあり得ないものであるなら、この問いは意味をなさないだろう。しかし、私たちは日常的にある程度高い次数の「読み合い」を行っている (cf. Corballis 2011).¹¹ このことは、洗練された形で言語を使いこなすようになる段

¹¹Corballis (2011) は、言語を可能にするヒトの認知能力のうち最も重要なものは、社会的な「心の読み合い」に適応した再帰構造の処理能力であり、ヒトは最大で5次または6次の再帰構造を処理可能であると論じる。

階以前の幼児が示す認知能力に目を向ければ明らかである。

子供は母語を生後 12 ヶ月頃の時期に発し始めるが、それに先立つ 9 ヶ月頃にそれまでは見られなかった様々な振る舞いを示すようになる。例えば、周囲に対して協調的な態度を示したり、自分の行為の障害になるような物体に周囲の注意を喚起したりするようになる。そして最初の言葉を発し始めるころには、はっきりと他者の視線の存在を意識し始め、「他者の視点」から対象物を見ることができるようになってくる。このことは、視線の追従や、指差しといった形で観察される。さらに生後 13~15 ヶ月の時期になると、自らの視線に対する他者の気づきを意識できるようになる。この段階では、自分の意図や目的に対する周囲の反応から何かを学んだり、あるいはそれに応じて何かを伝えたりするようになる。図 4 は、幼児のこのような認知発達のプロセスを表している (Tomasello 1999)¹²。

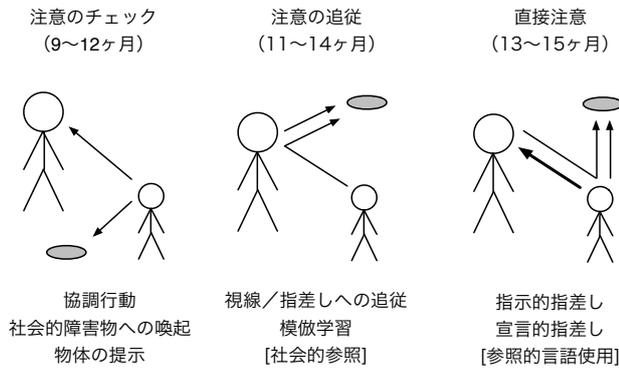


図 4 幼児の認知発達

ここで、13~15 ヶ月の段階というのは、最初の言葉こそ発せられているものの、文法的な洗練からは遠く、高次の埋め込みを含む文などは兆候も見られない段階である。しかし、図 4 の右側に示されるような指示的あるいは宣言的な指差しが可能であるためには、基本的な「心の読み合い」の能力が獲得されていなければならない。そうした指差しの背後にある幼児の認知的到達をあえて言語的に表現するならば、次のようになるだろう。

(11) 子どもは対象 X をみている自分をみている他者の存在を理解できるようになる

つまり、言語によるコミュニケーションに参画するには、最も基本的な部分で (11) のような理解が常に

求められる。ところが、そのような基本的な理解をあらためて言語化するとなると必ずしも簡単にはいかない。意識の水面下で生じている「心の読み合い」を明確に意識し、さらに再帰的な埋め込み構造によって表現することがなぜそれほど困難なのだろうか。

英語や日本語の構造的な性質にもとづいた提案はすでに示した通りである。しかし、この問題をヒトの認知に関するより基本的なレベルでの議論と結びつけるなら、Searle (1983, 1998) がいう志向の状態 (intentionality) の概念との関係が重要なものとして想起される。志向の状態とは世界を構成する自己以外の様々な事物・事象に関する—あるいはそれらに向けられた—心的状態であるが、Searle (1998) は言語に関わる志向の状態には大きく分けて次の 2 つのモードが存在すると論じている。

- (12) a. 世界から言葉へ的一致
(world-to-word direction of fit)
b. 言葉から世界へ的一致
(word-to-world direction of fit)

(12a) の「世界から言葉へ的一致」とは、主体が信念 (belief) や仮説 (hypothesis) を抱くときにとる志向の状態のである。信念とは何らかの根拠や確信と共に保持される世界の在り方の像であり、仮説とは暫定的に措定された像である。一方、(12a) の「言葉から世界へ的一致」とは、欲求 (desire) や意図 (intention) と関連付けられる志向の状態である。

様々な発話の中で、遂行文 (宣言、誓約、謝罪、etc.) に対して、陳述文は談話領域における情報管理の一貫として主に情報を (再) 提起するという目的でなされる。陳述文も遂行文としての側面を持っていると言えるが、基本的に両者はある程度明瞭に区別し得る。遂行文は「言葉から世界へ的一致」を目指す手段であり、陳述文は「世界から言葉へ的一致」を目指したものである。

では、say や believe といった心理・報告動詞を用いて命題的な概念を言語化するとき、これら 2 種の志向の状態はどのように関わってくるのだろうか。一見すると、こうした心理・報告動詞はもっぱら「世界から言葉へ的一致」の表現である。第 1 に、say や believe といった動詞は、主語として表現される主体が補文の内容を信念や仮説として持っていることを含意するからである。第 2 に、say や believe といった動詞を含む文を発話する話者は、その発話内容を信念の一部として—たとえ Grice 的な会話の公理に基づく「構え」としてであっても—真であるとして述べていると期待さ

¹²図 4 に付された説明は Tomasello (1999) の日本語版 (『心とことばの起源を探る』大塚壽夫・中澤恒子・西村 義樹・本多啓訳、勁草書房) を参考にした。

れるからである。

しかし, *say* や *believe* といった心理・報告動詞の概念構造は一人称的な経験と関連付けられている。それゆえに, これらの動詞が一人称で用いられるとき「字義的な意味」は希薄になる。例えば, (13)における *I said* および *I think* は客観的な意味内容の観点からすると冗長である。仮に (14) のように述べたとしても実質的な命題内容は変わらない。

- (13) a. I said you must finish it today.
b. I think she will come back to work soon.

- (14) a. You must finish it today.
b. She will come back to work soon.

こうしたことから, 一人称表現と共に用いられる心理・報告動詞の価値は, 客観的な意味内容よりもむしろ語用論的な機能にあると言える。それらは字義的には「世界から言葉への一致」の志向的状态を反映させた陳述表現でもあるが, それと同時に, 世界のうちに何らかの結果状態が生起することを企図した発話行為(説得, 主張, 補足, etc.)を生むような手段として, すなわち「言葉から世界への一致」の志向的状态を表示する手段として機能しているのである。この点が心理動詞や報告動詞の重要な特徴であり, そのような特徴ゆえに, 構造的には再帰的な埋め込みを許すが, 実際には様々な制約を伴うという興味深い事実が生じてくるものと考えられる。

7. おわりに

言語に特化したモジュール的機構を想定しない認知言語学的の観点に立つと, 英語や日本語の文法は, 意図した目的が発話によって達成される蓋然性が高くなるよう, 歴史的な時間の中で漸進的に構成・調整されてきたと考えられる。表現すべき対象が複雑化すれば, 当然それに応じた言語的仕掛けが求められる。言語の再帰構造はそのような仕組みの一つであろう。

しかし, たとえ原理的に可能であっても, 実際の言語使用において多重的な埋め込みは様々な要因により抑制される。本稿では, 再帰構造の中でも心理動詞および報告動詞を軸とした補文関係が多重に埋め込まれるタイプの再帰構造に焦点を当て, 考察を行った。また, これらの動詞には本来相反的な2つの志向的状态の生起が関わっていることが, 様々な制約の要因となっている可能性を示した。

本研究は未だ発展段階にある。ここで扱った問題は言語学, 心理学, 哲学などの領域で長らく議論されて

きた種々の事柄と関係が深い。歴史的な伝統の中で多くの知見が集積されているが, 理論的枠組みや術語の違いがある。これらを統合して新たな展開を試みることが求められる。加えて, 定量的な観点からの調査・考察も必要であろう。

さらに, 異なる「話法」の性質について検討することも重要である (cf. Vandelanotte 2009)。間接話法, 直接話法に加えて, 文学作品などでは自由間接話法, 自由直接話法といった話法がしばしば用いられる。様々なスタイルによる概念の表示の分析を通じて, 多重的な補文構造の性質や, それが選択される語用論的な動機といったものがより明確になると期待される。

参考文献

- [1] Chomsky, N. (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge, MA: MIT Press.
- [2] Chomsky, N. (1995) *The Minimalist Program*. Cambridge, MA: MIT Press.
- [3] Corballis, M. C. 2011 *Recursive Mind: The Origins of Human Language, Thought, and Civilization*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- [4] Fauconnier, G. (1997) *Mappings in Thought and Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- [5] Harder, P. (2010) “Over the top: Recursion as a functional option”, *Recursion and Human Language*. Berlin: Mouton de Gruyter, 233-244.
- [6] 長谷部陽一郎. (2007) 「日英語の話法選択について—認知的接地の観点から—」, 『表現研究』, 第86巻, pp. 20-29.
- [7] Hasebe, Y. (2015) “Design and implementation of an online corpus of presentation transcripts of TED Talks”, *Procedia: Social and Behavioral Sciences*, Vol. 198, No. 24, pp. 174-182.
- [8] 長谷部陽一郎. (2016) 「言語における再帰と自己認識の構造—認知文法の観点から—」, 『ラネカーの(間)主観性とその展開』, 東京: 開拓社, pp. 269-304.
- [9] 廣瀬幸生. (2016) 「主観性と言語使用の三層モデル」, 『ラネカーの(間)主観性とその展開』, 東京: 開拓社, pp. 333-355.
- [10] Langacker, R. W. (1985) “Observations and speculations on subjectivity”, *Iconicity in Syntax*. Amsterdam: John Benjamins, pp. 109-150.
- [11] Langacker, R. W. (1987) *Foundations of Cogni-*

- tive Grammar*, vol. 1, *Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- [12] Langacker, R. W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar*, vol. 2, *Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
- [13] Langacker, R. W. (2002) “Deixis and subjectivity”, *Grounding: The Epistemic Footing of Deixis and Reference*. Berlin: Mouton de Gruyter, pp. 1-28.
- [14] Langacker, R. W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction* Oxford: Oxford University Press.
- [15] Langacker, R. W. (2009) *Investigations in Cognitive Grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- [16] 中村芳久. (2013) 「認知モード・言語類型・言語進化—再帰性 (recursion) との関連から—」, *Kanazawa English Studies*, 第 28 卷, pp. 1-16.
- [17] Searle, J. R. (1983) *Intentionality: An Essay in the Philosophy of Mind*. Cambridge, MA: Cambridge University Press.
- [18] Searle, J. R. (1998) *Mind, Language, and Society: Philosophy in the Real World*. New York: Basic Books.
- [19] 時枝誠記. (1941) 『国語学原論』, 東京: 岩波書店.
- [20] Tomasello, M. (1999) *The Cultural Origins of Human Cognition*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- [21] Tomasello, M. (2003) *Constructing a Language: A Usage-Based Theory of Language Acquisition*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- [22] Vandelanotte, L. (2009) *Speech and Thought Representation in English: A Cognitive-Functional Approach*. Berlin: Mouton de Gruyter.